

都市河川の賑わい創出に資する 水辺のカウンターバー「mizube bar」の活動展開

笹川 遼¹・菅原 遼²・今村 勇紀³・田中 孝登⁴

¹学生非会員 日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻
(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1, E-csry21017@g.nihon-u.ac.jp)

²正会員 博士(工学) 日本大学理工学部海洋建築工学科
(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1, E-sugahara.ryou@g.nihon-u.ac.jp)

³学生非会員 日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻
(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1, E-csyu21004@g.nihon-u.ac.jp)

⁴非会員 株式会社山下PMC
(〒104-0044 東京都中央区明石町8-1 聖路加タワー29階, tanaka-koto@ypmc.co.jp)

近年、身近な水辺空間への都市生活者の関心の高まりに伴い、水辺の市民開放に向けた市民主導による水辺空間を活かした取り組みが展開されており、水辺の遊歩道等を拠点とした各種イベントが活発化してきている。本稿では、都市河川の賑わい創出に資する取り組みとして、都心部の都市河川沿いの手摺りに簡易的に設置し、人々の滞留の場の創出に繋げることを意図したカウンター「mizube bar」の活動展開を報告する。

キーワード:水辺空間, 官民連携, 河川, 市民開放

1. はじめに

近年、身近な水辺空間に対する都市生活者の関心の高まりに伴い、水辺の空間性を活かしたオープンカフェや川床を設けることによる賑わい創出に向けた取り組みが全国的に展開¹⁾されてきている。特に、最近では、「ミズベリング」に基づく取り組みを中心に市民主導による水辺空間の賑わい創出の取り組みは各地で実施されている。加えて、2020年以降の新型コロナウイルス感染症拡大を受け、日常生活圏の自然環境の貴重さが改めて見直され、都心部の水辺空間も同様に、日常的な水辺利用に対する市民の要求が高まりつつあるといえる。

本稿では、都心部の水辺空間の柔軟的利用に繋げる空間装置として、都市河川沿いの手摺りに簡易的に設置するカウンター「mizube bar」の取り組みについて、その活動展開について報告する。

2. 「mizube bar」の活動概要

(1) 活動目的

「mizube bar」の設置・運営に際しての関連組織の関係図を図-1に示す。「mizube bar」は、日本大学理工学部海洋建築工学科・親水工学研究室(以下、日本大学)が設計・製作したカウンターバーであり、本来、安全性

を確保するために河川沿いに設けられた安全柵を活用し、簡易的な取り付け・取り外しを可能としたカウンターバーとして、来訪者による河川空間の利用方法を「飲食の場」「趣味の場」「仕事の場」「交流の場」等に一時的に変化させることを目的としている。

「mizube bar」の取り組みは、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う外出自粛による都市生活者にとっての身近な水辺空間利用に対する希求意識の高まりを背景に、2020年から各地域で試行的取り組みとして実施している。

「mizube bar」の設置に際しては、地域内の市民団体、事業者、自治会、行政(河川管理者)等の各種組織・団体との連携を図り、河川沿いで営業している飲食店舗の立地価値の向上に繋げ、川辺の賑わい創出を契機とした地域価値の向上への寄与を目指している。

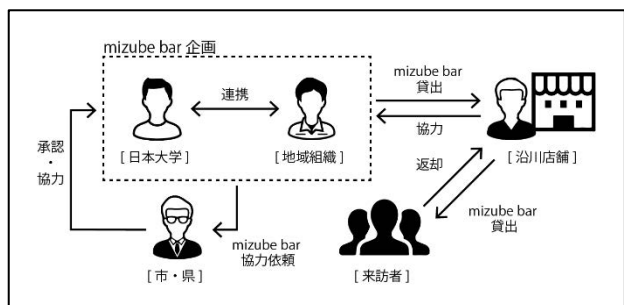


図1 目標とする関与スキーム

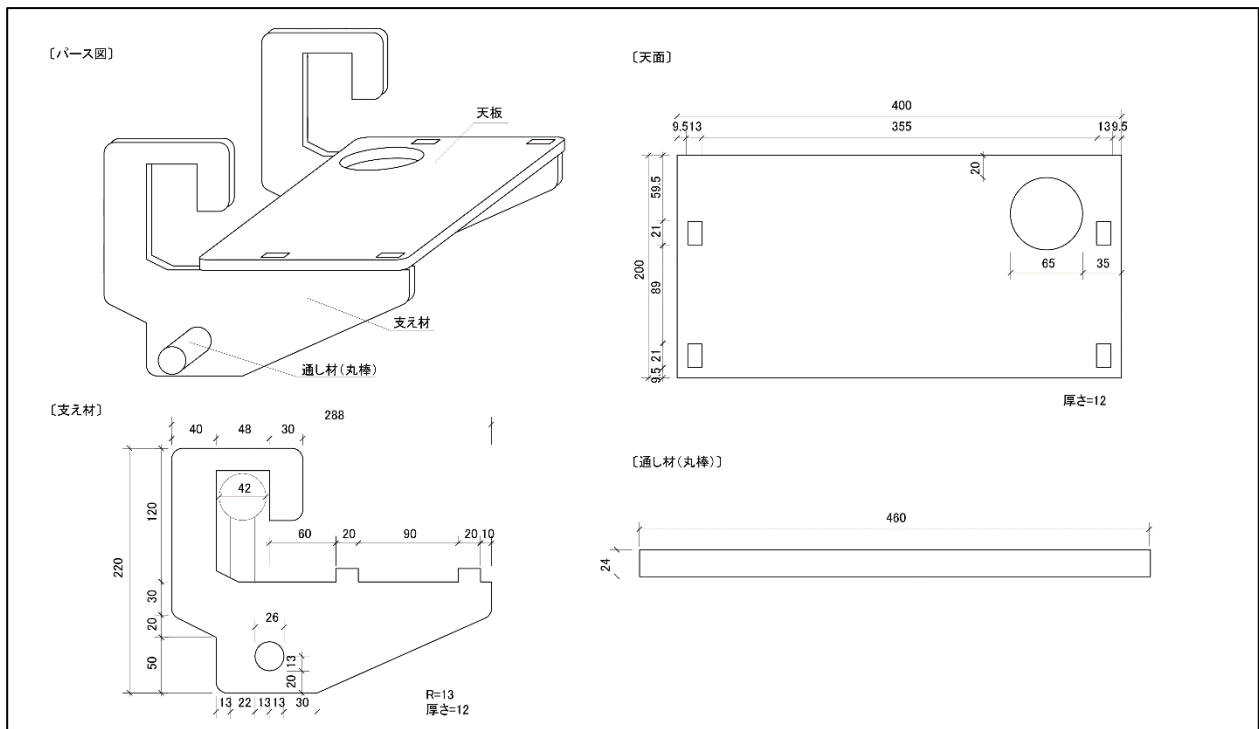


図3 大岡川型「mizube bar」概要

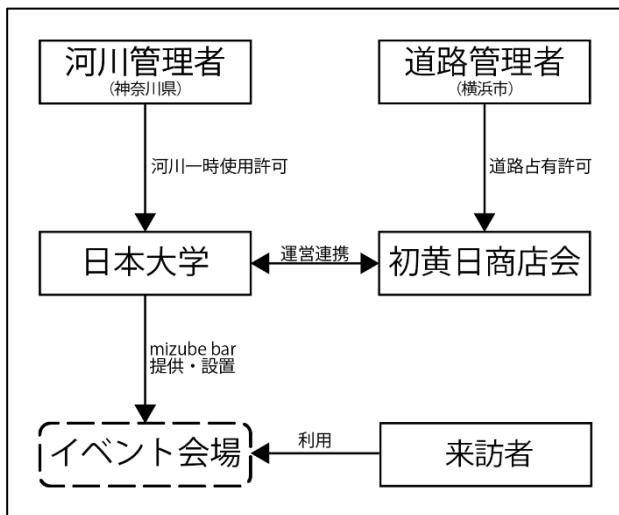


図2 大岡川での関与スキーム

「mizube bar」の設計・製作に際しては、既存の河川空間の空間構成や川辺の手摺りの寸法等に応じて形状や組み立て方を検討しており、河川景観への配慮や飲食テーブルとしての機能性、利用上の安全性の確保等を考慮している。

(2) 各地域での取り組み内容

ここでは、「mizube bar」の設置による河川空間の賑わいづくりに向けた試行的な取り組みとして、神奈川県横浜市・大岡川、東京都江東区・隅田川、東京都墨田区・北十間川の取り組み概要について報告する。



写真1 大岡川での使用風景



写真2 大岡川での使用風景

a) 神奈川県横浜市・大岡川

横浜市大岡川における事業スキームを図-2、横浜市大岡川に設置した「mizube bar」の概要を図-3、横浜市大岡川での「mizube bar」の設置風景を写真-1, 2に示す。横浜市大岡川では、地元商店会等が中心となり、大岡川沿いの道路空間を活用した地域イベントを実施しており、河川空間の滞留の場の創出を目的に「mizube bar」の設置を行なった。地域イベントには、大岡川沿いに並行して建造された京浜急行線の高架下の飲食店舗が参画しており、「河川区域-道路区域-高架下空間」を一体的に活用している点が特徴である。

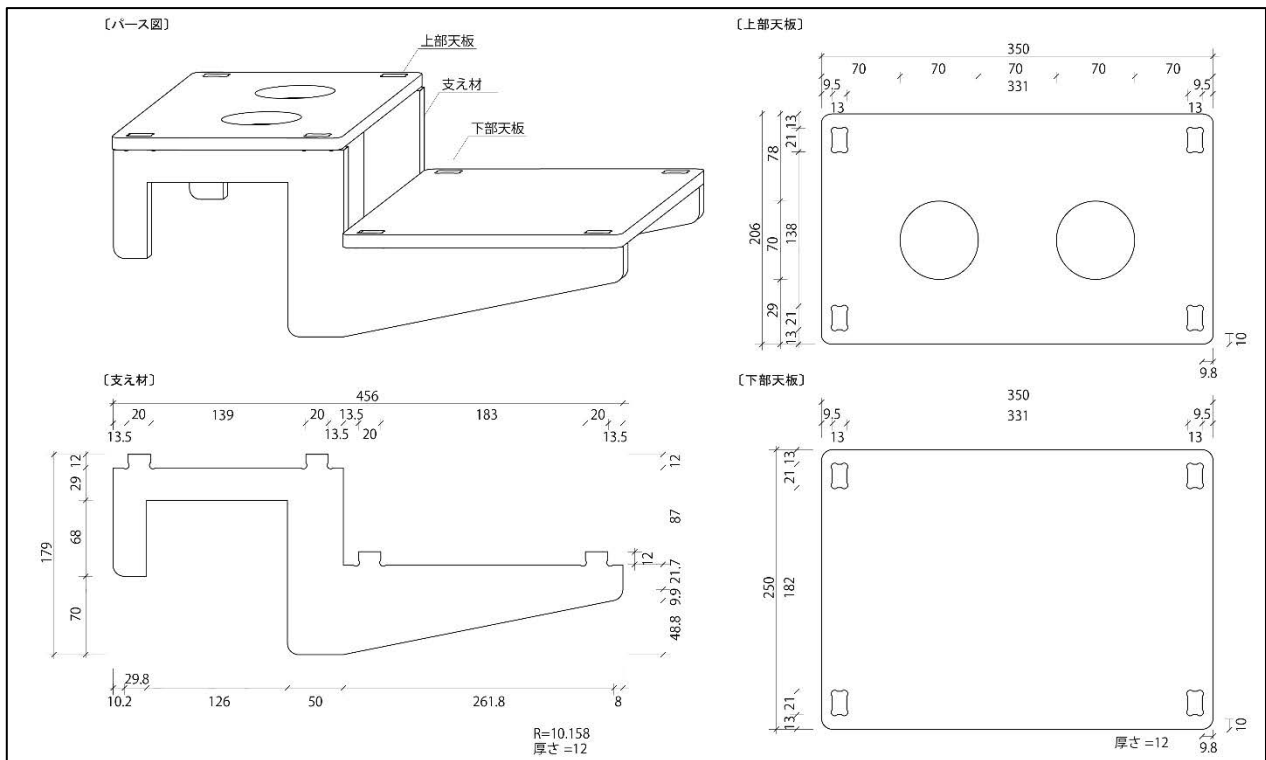


図5 清洲橋型「mizube bar」概要

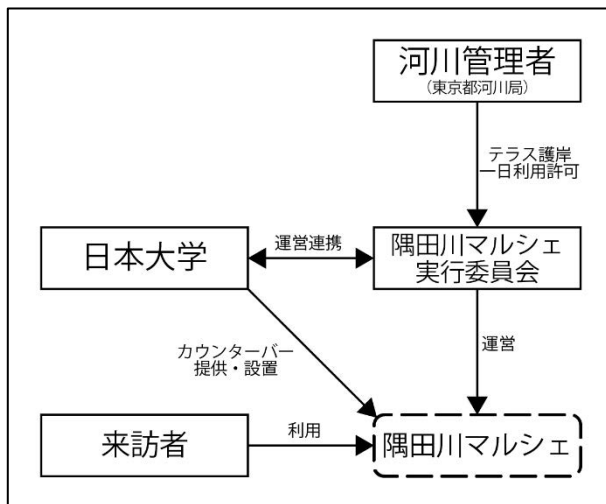


図4 隅田川での関与スキーム

横浜市大岡川での取り組みは、「mizube bar」の初動期の活動であり、将来的な設置・運用モデルとして、「mizube bar」を沿川店舗に貸し出すことによる地域管理を想定していたため、2020年7月より、研究室の学生を中心に、自治会や沿川店舗の事業者、河川管理者に対して、企画意図の説明・共有と設置に向けた各種協議を進めてきた。特に「mizube bar」の設計に際しては、道路区域上の空中越境を避けるように天板のサイズを調整し、手摺り自体への負荷を軽減するよう緩衝用ゴムを取り付けるなど、河川管理者への協議対応を考慮した工夫を凝らした。また、河川管理者に対しては、日本大学として「河川一時使用届」を提出した。

2020年9月の地域イベントでの設置を皮切りに、「黄金町バザール」「はつこひ市場」「クリスマスパンマル



写真3 隅田川での使用風景



写真4 隅田川での使用風景

シェ」 「FOOD ART STATION」等の各種地域イベント時に「mizube bar」の設置・運用を行い、河川沿いの滞留場の創出のきっかけとして機能した。

b) 東京都江東区・隅田川

江東区隅田川における事業スキームを図-4、江東区隅田川に設置した「mizube bar」の概要を図-5、江東区隅田川での「mizube bar」の設置風景を写真-3, 4に示す。隅田川沿いの親水テラス「隅田川テラス」では、地域組織主導による水辺のマルシェイベント「隅田川マルシェ」

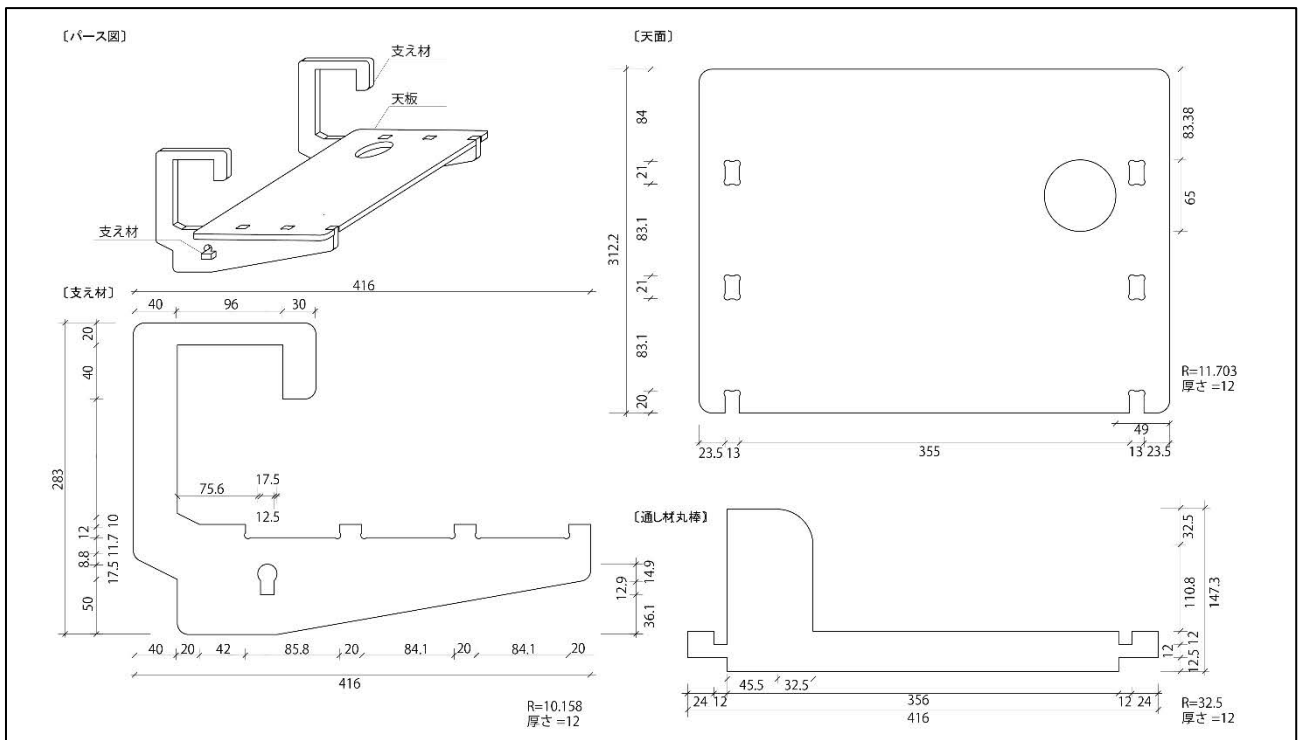


図7 北十間川型「mizube bar」概要

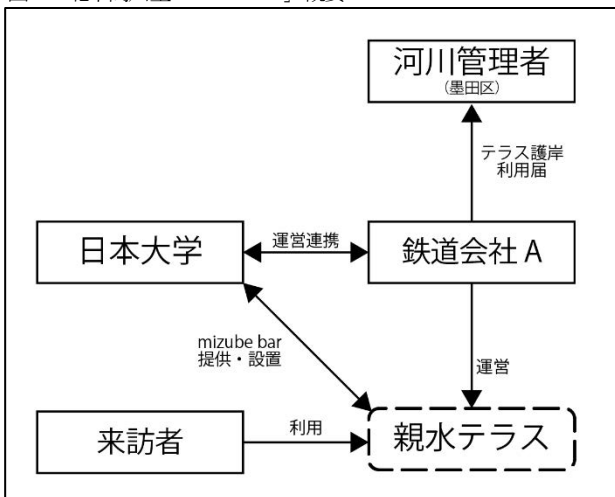


図6 北十間川での関与スキーム

が継続的に開催されており、近隣住民を中心に多くの来訪者による賑わい創出に繋がっている。隅田川マルシェは、地域住民や企業の有志により構成された「隅田川マルシェ実行委員会」による企画・運営がなされており、清洲橋付近の隅田川テラス（以下、清洲橋）での開催を契機に、両国付近（以下、両国）や越中島付近（以下、越中島）等の隅田川テラスにおいてマルシェを実施している。

日本大学は、隅田川マルシェへの協力の立場として参画しており、清洲橋、両国、越中島の各手摺り形状を考慮した上で「mizube bar」を製作した。隅田川沿いの手摺りは、高さ90cmと一般的な手摺りよりも若干低い特徴があったため、二段構成の天板のテーブルを設けることで、利用者の利便性の向上に繋がることを意図した。隅田川マルシェでは、清洲橋で2021年10月、11月、両国で2021年11月、越中島で2021年11月、2022年5月、8月にお



写真5 隅田川での使用風景



写真6 隅田川での使用風景

いて「mizube bar」を設置しており、隅田川マルシェの集客力も相まって、多くの来訪者の利用に繋がった。

c) 東京都墨田区・北十間川

墨田区北十間川における事業スキームを図-6、墨田区北十間川に設置した「mizube bar」の概要を図-7、墨田区北十間川での「mizube bar」の設置風景を写真-5、6に

示す。墨田区北十間川では、河川沿いに開発された公園と高架下の商業施設「東京ミズマチ」において、親水テラスの来訪者の促進と賑わい創出を目的に「mizube bar」を設置した。特に、東京ミズマチの日常的な管理・運営を担う鉄道会社との連携を図ることで、各種イベントとの連動や河川管理者（墨田区）との協議を進めていった。

設置に際しては、2021年6月に試験的設置を行い、利用者アンケート調査や通行量調査を実施することで効果検証を行い、その後、2021年12月～2022年3月の期間における恒常的な設置が可能となったため、実証実験として20基の設置試験を実施した。

3. おわりに

「mizube bar」の設置・運用は、沿川店舗や地域組織と連携を図った上で、柔軟な河川空間利用を可能としており、各地域の河川空間のポテンシャルの発掘に繋げるとともに、関係者からの再度の設置を求める要望も多く発信されていることから、各地域の設置・運用時には、沿川店舗やイベント参加店舗の価値向上に寄与し得たと考える。その一方で、必ずしも沿川店舗や地域組織を主体とした「mizube bar」の地域管理への移行はなされておらず、今後も継続的な取り組み実施を通して、「mizube bar」の地域管理に向けた自立的な体制構築の検討を進めていく必要がある。

参考文献

- 1) 菅原遼，畔柳昭雄：水辺の社会実験から見た河川区域の空間利用と地域連携に関する研究 空間構成と事業スキームに着目して，日本建築学会計画系論文集，第81巻 第722号，2016年